群教セ	G02 － 02
	令3.278集
	社会－小

自らの考えと既習事項を結び付けて、単元の課題を追究できる児童の育成

――視覚的資料を取り入れた１枚ポートフォリオとICT端末の活用を通して――

特別研修員　藤生　健一

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説社会編（平成29年）では改訂の基本方針として、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が挙げられている。また、群馬県の教育委員会の令和３年度学校教育の指針では，諸資料から読み取れる情報を根拠とし，社会に見られる課題の解決に向けて考えたことについて他者と語り合う活動を設定することを学びを深める授業改善のポイントとして挙げている。

本校の児童の多くは、学習に意欲的に取り組むことができている。しかし、自らの考えを既習事項と結び付けて考えることに課題が見られる。また、単元のまとめの場面においても、今までの学習を踏まえてまとめを書くことが苦手な様子が見られる。それは、既習事項がまとめと結び付かず、単に言葉だけを覚えようとしているためだと考えられる。

そこで，自らの考えと既習事項を結び付けるために，視覚的資料を取り入れた１枚ポートフォリオを作成し活用する。さらに、ICT端末を活用し意見を交流させて、その交流を生かしたまとめをさせる。

最後に、初めの自分の予想と既習事項を基に考えた最後の結論を比較させて、自分の考えの変容に気付かせる。

以上の手立てを用いれば、既習事項を結び付けて単元の課題を追究することができるようになると考え、上記のとおりテーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図

２　授業改善に向けた手立て

児童が、自らの考えと既習事項を結び付けて，単元の課題を追究できるようにするために、次のような手立てを用いた。

手立て1　まとめの蓄積

手立て１では、各単元のまとめを中心に１枚ポートフォリオにまとめを蓄積させていく。この、１枚ポートフォリオとは、単元を通して学習したことを１枚のワークシートにまとめて、児童の学習内容を積み重ねていくものである。児童が単元の課題の解決に向けて学習してきたことを確認できるだけでなく、教師も児童の学習状況を把握することができる。さらに、自らの考えを基に選んだ視覚的資料を１枚ポートフォリオに加えることで、一目で分かりやすい資料として児童が活用できると考える。

手立て２　ICT端末の活用

手立て２では、ICT端末を活用することで、一斉にクラス全員の考えや意見を確認させていく。既習事項を基に個人で追究してきた単元の課題に対する結論が、本当にこれでよいかどうか見直しをさせるために、単元の結論を交流させる。更にこの交流で新たな考えに出会う機会をつくり考えを深める手立てとする。

手立て３　振り返りの工夫

手立て３は、まず振り返りの工夫として１枚ポートフォリオに記述した単元の課題に対する予想と結論を比較させる。この比較により単元を通して自らの考えが既習事項と結び付いて変容したことに気付かせる。また、交流を通して考えた単元の結論を見直し、新たに気付いたキーワードを確認させる。

このように１枚ポートフォリオを活用した活動を通して、自らの考えと既習事項を結び付けることで単元の課題を追究する力を身に付けさせることになる。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　自らの考えを基に選んだ視覚的資料と既習事項を１枚ポートフォリオ上で結び付けることにより、結論を書く上で必要なことが児童にとって分かりやすくなった。

○　１枚ポートフォリオを作成したことにより児童が、単元及び 1 単位時間の授業の流れを把握しやすくなった。また、学習した内容が一覧になるので、教師が児童の学習状況を把握しやすくなった。

○　自分の結論と他者の結論を確認して，児童が類似点や相違点を見出すことで、1 人で考えただけでは気付くことができない新たな考えに触れられたので、自らの考えを深めることができた。

○　１枚ポートフォリオに書かれた単元の課題に対する予想と結論を比較することで、自らの考えが変容してきたことに気付き、既習事項と結論の関係を考えることができた。

２　課題

○　１枚で一単元の内容をまとめるポートフォリオを作成するのは１枚ポートフォリオに書きこむ内容を精選する必要がある。

○　さらに考えを深める手立てとして、なぜそのような単元の結論になったのか質問できる場を設け、意見交流をさせることも考えられる。

○　紙ベースでの１枚ポートフォリオの作成だったが、今後は ICT 端末を用いることで児童が画像を容易に選んだり、互いの１枚ポートフォリオを瞬時に確認したりできると考える。

実践例

１　単元名　　「自然災害からくらしを守る」（第４学年・２学期）

２　本単元について

本単元では、過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりしてまとめ、災害から人々を守る活動を捉えていく。また、地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処していることや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解し、その働きを考え、表現することを通して、災害に対しての意識を高めることをねらいとしている。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	自然災害から人々を守る活動について追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア　地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解する。（知識及び技能） イ　過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、災害から人々を守る活動を捉え、その働きを考え、表現する。（思考力、判断力、表現力等） ウ　自然災害から人々を守る活動について関心をもち、単元の課題を予想し学習計画を考えたり、意欲的に調べたりして、学んだことを社会生活に生かそうとする。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1)① 地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解している。（知識・技能） ② 調べたことをポートフォリオや文などにまとめ，地域の関係機関や人々は，自然災害に対し，様々な協力をして対処してきたことを理解している。（知識・技能） (2)① 過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、問いを見いだし、災害から人々を守る活動を捉え、その働きを考え、表現している。（思考・判断・表現） ② 地域で起こり得る災害を想定し，日頃から必要な備えをするなど，学習してきたことを基に自分たちにできることなどを考えたり選択・判断したりして、適切に表現している。（思考・判断・表現） (3)① 自然災害から人々を守る活動について関心をもち、単元の課題を予想し学習計画を考えたり、意欲的に調べたりして、学んだことを社会生活に生かそうとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・群馬県内で過去に起こった様々な自然災害の概観し、学習の見通しをもつ。
	第２時	・群馬県内で過去に起きた水害の概要について理解する。
	第３時	・前時までの水害の被害の様子について話し合ったことを基にして、水害が私たちの暮らしに与える影響について話し合い、疑問から単元の課題をつくり、予想し、学習計画を立てる。 【単元の課題】水害からくらしを守るためにだれがどのようなことをしているのでしょうか。
追究する	第４時	・必要な情報を集め、読み取り、家庭でできることは、起きる前の準備と起きてからの対策をすることだと理解する。
	第５時	・資料や本文を基に、学校や地域でも、水害に対する備えをしていることについて調べ、表現する。
	第６時	・市では、水害に対する準備や対策、消防や警察、群馬県や国との連携をしていることについて理解する。
	第７時	・市の助けを借りつつ、市と地域住民が連携しながら、水害に対する準備や対策をしていることについて理解する。
	第８時	・水害が起きたときのために住民同士がどのように協力しているのか調べ、話し合う。
まとめる	第９時	・課題「水害からくらしを守るために、だれがどのようなことをしているのか」について考える。
いかす	第10時	・これまで学習したことを基に、水害からくらしを守るために、自分たちにできることを考え、その理由や根拠を発表する。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全10時間計画の第９時に当たる。ここでは、単元の課題「水害からくらしを守るためにだれがどのようなことをしているのでしょうか」を基に、１枚ポートフォリオに書かれた記述や友達の考えを参考に自分なりの単元の結論を書かせる。

そのための具体的な手立ては、次のとおりである。

手立て１　まとめの蓄積（前時まで）

まとめに関連する視覚的資料と既習事項を結び付けて、各単位時間のまとめを１枚ポートフォリオに書きためさせる。

手立て２　ICT端末の活用

既習事項を根拠とした考えを集計ソフトに入力させる。ICT端末で全体の考えを確認させてから、もう一度自分の考えを見直して、調整させる。

手立て３　単元の課題に対する自分の考えの振り返りの工夫

予想と結論を比較し、新たなキーワードにアンダーラインを引かせ、自らの考えが既習事項と結び付いていることや、友達との交流で調整できたことに気付かせる。

４　授業の実際

(1)　手立て1　まとめの蓄積（前時まで）

第４～第８時までに単位時間ごとのまとめを、視覚的資料を入れて１枚ポートフォリオに書きためさせた。視覚的資料とは、教師が用意した各単位時間のまとめに関係する資料のことである。この視覚的資料を取り入れて作成した１枚ポートフォリオを活用することで、児童は一目で学習内容を振り返ることができた（図１）。また、視覚的資料を単位時間に数種類用意し、児童が自らの考えを基に資料を選ぶように工夫をした。資料を選ぶ際には、既習事項を基に資料を選ぶように声を掛け、各単位時間の学習内容とまとめが関連するようにポートフォリオを作成させた。１枚ポートフォリオには、単位時間毎のまとめが一覧になっているため、このまとめを利用して最終的に単元の課題を解決することにつなげた。

教師としては、児童の学びの程度を把握するために、このポートフォリオのまとめの記述を活用した。まとめの記述が学習内容に対して不十分な児童には、ポートフォリオにコメントを加え、次の学習につながるように支援した。

授業後に「１枚ポートフォリオのよいところはどんなところですか」と児童に質問したところ、「前の授業の振り返りが分かりやすくできる」や「一枚の紙に学習をまとめられるから、考えやすい」という記述があった。このことから、児童は１枚ポートフォリオを使うことで、学習内容を振り返ることができていたと考えられる。

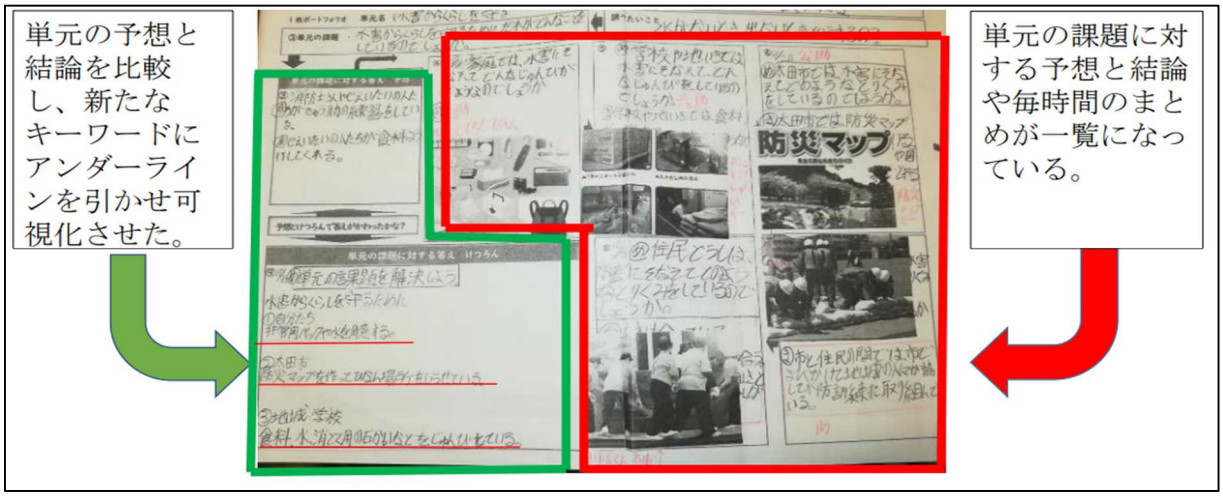

図１　視覚的資料を用いた１枚ポートフォリオ

(2)　手立て２　ICT端末の活用

本時では、学級全体で単元の結論について話し合い、単元の課題を解決する際、児童の結論を表計算ソフトに入力させた（図２）。児童は、個人の ICT端末を用いて他の児童の結論を見ることで、自分だけでは気付かなかった新たな考えに出会う機会になった。クラスの友達の意見を参考にし、単元の課題に対する結論を調整して、単元の結論を完成させるように促した（図３）。

14	避難用バックを用意する\	防災マップを作って市民似、知らせている\	水害が起きたときの準備\
14	非常用食料品を用意している！！！！	食料や水を市民に分けている！！！！！！！！	水害が、おっこったらいつでも避難できるようにしている！！！！！！！！！！
15	避難用バッグや避難場所を確認したりして対策をしている。	防災マップを作ったり、県や国とも連絡を取れるようにしている。	食料、水、消毒用の石かいなどの準備をしている。
16	ひなん用のばっくを用意している	防災マップ	学校や地域では食料、水、消毒用の石かいなどの準備をしている。
18	ひなん用のバックや、マイタイムラインとかを、確認している。	きょうりょく、している。	ご飯、水、土とかを、用意している。
19	災害用バック、タイムラインの準備をしている。	防災マップを作り市民に伝えている。	もしも、起こったときにいつでも、ひなんじょに入れるようにしている。
		防災マップをつくったり、警察、消防本部、	

図２　表計算ソフトを用いた意見の一覧

ICT端末で児童全員の意見が見られるようになっているので、自分と似ている考えや違う考えに触れて、さらに自分の考えを調整することができた児童が多かった。

図３　結論を調整する児童

(3)　手立て３　課題に対する自分の考えの振り返りの工夫

１枚ポートフォリオには、単元の課題に対する予想と結論が書かれているため、単元の課題に対する始めと終わりの自分の考えを比較することができるようになっている。

まず、単元の初めに課題に対する予想を書くことによって、見通しをもって学習に取り組ませることができた。本時では単元の予想と結論を比較させ、結論で書かれた新たなキーワードにアンダーラインを引かせ可視化した。友達との意見交流や自らの考えを調整し、新たな気付きを可視化したことにより、当初災害について実感がわかなかった児童も、単元の終末では、自分事と捉えられるようになり、以下にあるような単元を通した振り返りの記述につながった（図４）。

- 最初は自衛隊の人や消防士さんが助けてくれるのかと思っていたけれど、この勉強をして住民や市の人、県などが協力をして災害に備えていることが分かりました。これからも災害に備えて避難バッグや避難グッズを用意し、災害になっても食料などに困らないようにしたいです。
- この学習を通して、災害に備えていろいろな人たちが準備をしていることが分かりました。災害によって人の命や財産がなくなってしまうので、そうならないための準備が大切だと思いました。

図４　単元を通した振り返りの記述

５　考察

本研究で活用した、この１枚ポートフォリオには、単元のつかむ過程での「予想」と追究する過程の「まとめ」、まとめる過程の「結論」、単元を通しての「振り返り」が書かれるので、この一枚で単元の学習が完結できるという利点がある。さらにまとめを蓄積させることで、単元を通して既習事項を確認することができ、単元の課題に対する考えの参考になった。

さらに、交流活動の前に ICT 端末を用いて、自分の手元でクラス全員の考えに触れさせた。そこで、自らの答えとの類似点や差異を確認できたことで、誰とどのような交流をすればよいか見通しをもつことができた。また、交流の後に書いた結論を振り返り、予想の段階では考えられなかったキーワードを見付け、アンダーラインを引き可視化をすることで、児童は自らの考えを調整できたことに改めて気付き、考えを交流することのよさを感じることもできた。このように児童が学び、考えたことを単元の学習を通して調整する姿は、主体的に取り組む態度の評価の観点としても活用できると考える。